



Title	Cグループ : 子どもの自己発見をサポートするには？
Author(s)	津村, 樹理
Citation	GLOCOLブックレット. 2012, 8, p. 102-107
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48399
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

III

グループワーク

課題の解決策の アイデアを考える

Cグループ： 子どもの自己発見をサポートするには？

津村樹理 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程

1. 自己紹介

今回のワークショップにおけるCグループの参加者の属性は、以下の通りである。

教育関係者2名、実践支援者1名、大学院生1名、大学生2名(実践も兼ねる)、その他1名(実践も兼ねる)で、このうちトランスナショナルな子どもとして日本で教育を受けた経験を持つ参加者は1名であった。

2. テーマを遂行するためのアイデア

テーマ「子どもの自己発見をサポートするには？」を遂行するために必要なアイデアとして挙げたのは以下のものである。

- ①色々な場所に行ってみる
- ②日本人の自分とそうではない友人と第三国へ行く
→“自分の場所”という感覚があるので、互いにとって“違う場所”へ行ってみて、知れたり、感じたりすることもあるのではないか。
- ③プレゼンテーション(発表)をする
→自分の事について語る、そして知ってもらう。
- ④自分の故郷について語ってもらう
→日本国内外問わず、その人の事を知りきっかけの一つとして。
- ⑤子どもの話を聴く
→当事者の話を聴く。
- ⑥図画工作教室を開く
→自分を表現する手段の一つとして、特に話すことが難しかったり、うまく言葉で伝えることが難しい子どもは、言

葉以外の表現を使って自分を周りに伝えていくことができるのではないか。

- ⑦スポーツ大会・お祭りを開催する
→難しい話や学びばかりでなく、共に体験することを通して、共感や体験から分かることもあると思う。
- ⑧職場体験の機会を提供する
→自分の範囲の世界以外の場所を知ったり、将来像としてのイメージを作る一つのイメージとする。
- ⑨子どもだけではなく、その親へも、子どもの進路選択を伝える
- ⑩ふるさとのご飯を食べる
- ⑪他の文化の「おいしい」を知る
→自分との比較をする、そして自分を知る
- ⑫ビデオを見る
→それぞれの国へ行くことは難しいが、その国の様子を見ることでも知れることから始まることはあると思う。
- ⑬合奏を聴いて(色々な地域の)楽器を演奏してみる
- ⑭違う言葉や音楽に出会う
- ⑮まず友達になる
- ⑯友達・仲間と出かける
→遠足など
- ⑰歴史を知る・伝える
→他と比較して考える
- ⑱先輩の姿を知る・見る
- ⑲身近な先輩を訪問する
- ⑳入試などの制度を分かりやすく伝える
→説明方法

- ⑳ 子どもと根気よく付き合う
- ㉑ 母語でサポートする
- ㉒ 得意分野を探す
- ㉓ 自分の国の文化を教える、学ぶ
- ㉔ 違う文化の人と出会う
- ㉕ 話をする
- ㉖ 話を聴く練習をする
- ㉗ 皆で遊ぶイベントを企画する
- ㉘ 教育を選べる権利を保障する
- ㉙ お金のかからない教育を提供する
- ㉚ 民族学校を卒業した後の高校進学を可能にする
- ㉛ トランスナショナルな子どもたちが集う場所を作る

3. 遂行することができる期間

以上、出されたアイデアについて、上記の項目について、以下のように期間を設定した。どの程度の期間で遂行することができるかを話し合った結果、短期、中期、長期の3段階を設定した。これはアイデアとして出された内容が、学校や自分たちの身近な範囲で行



写真1 自己紹介やアイデアの各々の発表を傾聴する

うことを中心に考えられていることを受けて、すぐにできること、できないことを分けて考えていくことで、カテゴライズしやすいのではないかという意見が出されたことによる。

短期、中期、長期の期間については、以下の各説明の通りとし、上記項目を各期間に設定した。

◆短期

→期間としては数時間から数日、長くても数週間でできる活動を考えて。

- ・ふるさとのご飯を食べる
- ・他の文化の「おいしい」を知る
→自分との比較→自分を知る
- ・ビデオを見る
- ・合奏を聴いて(色々な地域の)楽器を使ってやってみる
- ・違う言葉や音楽に出会う
- ・まず友達になる
- ・友達・仲間と出かける(遠足など)
- ・歴史を知る・伝える(他と比較して考える)
- ・先輩の姿を知る・見る
- ・身近な先輩を訪問する
- ・入試などの制度を分かりやすく伝える(説明方法)

◆中期

→期間としては半年前後から1年以内で行えるものを想定して活動を考えて。

- ・色々な場所に行ってみる

- ・日本人の自分とそうではない友人と第三国へ行く
- ・プレゼンテーションをする(自分の事について)
- ・自分の故郷について語ってもらう
- ・子どもの話を聴く
- ・図画工作教室を開く(⇒自分を表現する)

- ・スポーツ大会・お祭りを開催する
- ・職場体験の機会を提供する
- ・子どもだけではなく、その親へも、子どもの進路選択を伝える

◆長期

→期間としては1年以上の期間を必要と

参加者の声

津村樹理 (大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程)

当事者である“子ども”自身の姿を見失わないようにすることを忘れてはならないと、改めて気付かされた。子どものための取り組みに、“大人”の存在とその手助けは欠かせない。その中で子どものためと考えて動いていることが、時には、いつの間にか大人の事情にはめようとしていたり、都合にシフトされたりして、子どもの姿を見失っていることがあるのかもしれない。

今回、大きく二つのことがまとめられると思う。

一つは、上記とも関連して“支援する側”と、“支援される側”とのつながりや、支援される側の“思い”を欠くことができないということ、互いの立場から活動することが必要だという事だ。

二つ目に、一方の視点ではなく、さまざまな立場にあるさまざまな角度からの、問題意識から解決、実行までの協働・協同の必要性だ。話し合いの過程で、自分の経験とはまた違った角度からの問題への視点や取り組みの相違に気付かされ、また新しい視点で考えられた。そして、根本的に問題としての捉え方も違うことにも気付かされた。

今回、我々は、グループで『子どもの自己発見をサポートするには?』というテーマで話し合いを行ったが、それらを通して気付いたことがある。それは、他のグループにも共通する提案があるということと、他

のテーマにも通じる解決策があるのではないかという事だ。今回は五つのテーマがあげられたが、実際にはもっと多くの問題が点在する。しかし、それらはそれぞれ単発の問題ではなく、相違と共に類似点や関係性もあるだろう。それらが、繋がりをみせていくこと、それぞれの点が、いずれは線としてつながっていくことを考える。

残念だったのは、時間が足りず、最後のまとめまで時間を割くことができなかったことだが、ここで終わりではなく、ここから先も各自が考え、そして何より行動に移す、ということ続けていくことに、意味があると考ええる。まずは自分たちのできること、身近なところから、しかし、自身、保護者、地域、学校…等だけでは難しい取り組みもあるだろう。最終的には行政のサポートを得るためにも、今後、全国各地の取り組みとの連携や関係づくり、そして、国としても政策や制度からのアプローチも求められると考える。

最後に、このワークショップにファシリテーターとして、また参加者として関わり、さまざまな立場の支援者や当事者の方々との出逢いは、私にとって大変貴重な経験となった。企画関係者、諸先生方、参加者の皆さまに感謝致します。

表1 テーマを遂行するために必要なアイデアと協働期間(Cグループ)

短期:数時間～数日(あまり準備なくできる。すぐにできる!)

	家族	地域	学校	ボランティア 団体	市町村	国	会社・企業	教育 委員会	大使館
ふるさとのご飯を食べる(他の文化の「おいしい」を知る→自分との比較→自分を知る!!)	○	○	○	○			○		
ビデオを見る			○						
合奏を聞いて(色々な地域の)楽器を使ってやってみる		○	○	○	○				○
違う言葉や音楽に出会う	○		○						
まず“友だち”になる		○	○		○				
友達・仲間と出かける(遠足など)		○	○	○					
歴史を知る・伝える(他と比較して考える)									
先輩の姿を知る・見る、身近な先輩訪問			○		○		○		
入試などの制度を分かりやすく伝える(説明方法)			○		○	○	○		

中期:半年前後

	家族	地域	学校	ボランティア 団体	市町村	国	会社・企業	教育 委員会	大使館
色々な場所に行ってみる	○	○	○	○	○	○	○	○	
日本人の自分とそうではない友人と第三国へ行く			○			○		○	
プレゼン(自分の事について)、自分の故郷について語ってもらう	○	○	○						
子どもの話を聴く	○	○		○					
工作・図工教室(⇒自分を表現する)		○	○						
スポーツ大会／お祭り		○	○	○				○	
職場体験			○		○		○	○	
子どもだけではなく、その親へも、子どもの進路選択を伝える	○		○	○			○		

長期:1年以上

	家族	地域	学校	ボランティア 団体	市町村	国	会社・企業	教育 委員会	大使館
子どもと根気良く付き合う	○	○	○						
母国語のサポート	○		○	○	○				
得意分野を見つけさせる	○		○						
自分の国の文化を教える、教えられる	○		○						
違う文化の人と出会う		○	○	○					
話をする、聞く練習	○		○						
皆で遊ぶイベントを企画する		○	○	○					

するであろうということ想定し、下記項目を設定した。

- ・子どもと根気よく付き合う
- ・母語でサポートする
- ・得意分野を探す
- ・自分の国の文化を教える、学ぶ
- ・違う文化の人と出会う
- ・話をする
- ・話を聴く練習をする
- ・皆で遊ぶイベントを企画する

4. 「どこと協働する事ができるか考えよう」

上記3の短期・中期・長期に行われるアイデアについて、「どこと協働することができるか」について話し合い、協働先を検討した。これら一連の流れと結果は、表1に示す。

テーマを遂行するために必要なアイデアと、そのアイデアについてどのような機関や

人と協働できるかについて、遂行できると考えられる期間別にまとめたものが表1である。それぞれのアイデアについて協働できる機関や団体を考え、それぞれのアイデアを協働できる機関に○がつけられている。

5. 協働できる機関・団体

上記2、3の項目について、どのような機関や団体と協働できるかを話し合い、家族、地域、学校、ボランティア団体、市町村、国、会社・企業、教育委員会、大使館の10団体に絞った。

6. 考察

（グループのグループワークの成果としては、最後のまとめの部分までは時間の都合で行うことはできなかったが、大きく以下の2点が大きな学びといえるだろう。

一つ目として、本グループではどちらかとい

〈参加者の感想〉

- ・自分の地域でやれる事をやろうと思いました。
- ・多様な人々が集まって話す事はパワーになる。
- ・世界は狭かった。
- ・意外なつながりを見つけました。
- ・日本人や外国人ではなく、人間。
- ・一人ではできないことをみんなの力でできるんだ。
- ・もっとこういう交流の場を増やそう。
- ・自分から発信できるデータ集めから始めます。
- ・情報と知り合いが増えました！
- ・当事者がしっかり育っていること、次へ発信しようとしている事が力強く感じられました。



写真2 出されたアイデアを付箋を使って表にまとめる

組み、解決への道を、より具体的に計画することが大切である。そして、それぞれの立場でできることから行動に移していくことが求められると考える。そのためにも、今回のワークショップは、今後もこのような意見交換や情報交換を引き続き行って、よいきっかけ作りにもなったのではないだろうか。

例えば“支援する側”の立場にある人が多かったが、“支援される側”とのつながりや、支援される側の“思い”を欠くことができないということが確認できた。また、どちらか一方からの関わり・行動ではなく、互いの立場から活動することが必要である。

二つ目に、さまざまな立場にある参加者が一つのテーマについて話し合うことで、異なる視点からの意見の交換が行えたという点では、大きな収穫があったと考える。話し合いの過程で、立場の相違による課題への視点の違いや、問題への取り組み方の相違に気付かされ、また新しい視点で考えられた。そして、根本的に問題としての捉え方も違うことにも気付かされ、それらに対する再発見をすることができたことは、新たな気付きでもあった。

この度の話し合いでは、活動(取り組み)内容に対して具体的な計画や活動内容を企画することはできなかった。今後への課題として、支援される側-支援する側、そのなかでのそれぞれのさまざまな立場においての視点を通して、広い視野での問題発見とそれへの取り